

刀屋車七
 浮名仇討
 松月新刀銘鑑
 曲馬琴作
 勝川春亭画

^13
 4465



4465

馬琴作



成氏息女
ねま衣也

刀屋羊七
うらみのあやうら
浮名仇討

松之月新刀明鑑

芝泉市梓



春亭画

いれ
あはれ道
しりぞめ
猪母の
里の
車

松之月新刀明鑑

曲亭馬琴編演

足利成氏

尊氏六代の孫鎌倉の管領大馬頭持氏の三男なり

濡衣姫成

氏の息女京都御軍我務公の御舎才義政公(配偶あり)が物の怪まうて枉死を蒙り
長尾判官目賢 管領家の執権嘉吉三年成氏を鎌倉へいれし主とす人

當川半九郎

成氏の近臣好色を頼の癖者なり女姫小艶書にたり又半七が妻か

花より慕ふ 楚六唐園を好む鎌倉を去る

武を重んず

るものごとく一刀亦は後

半九郎をばとく半七は好めり

あつた半九郎が乳母大悪無道の言の葉子に死あ

くたが娘の親の因果があひむらひて半七は好めり

干将楚六唐園

鎌倉の心士への執持は英

戸吉

楚六が才子の野道とも半九郎は好めり

刀屋半七

干将楚六が才子の野道とも

父の仇を討つ名をあらはる

機りか花

半七が妻の貞公傳り

七太郎半七

貞公

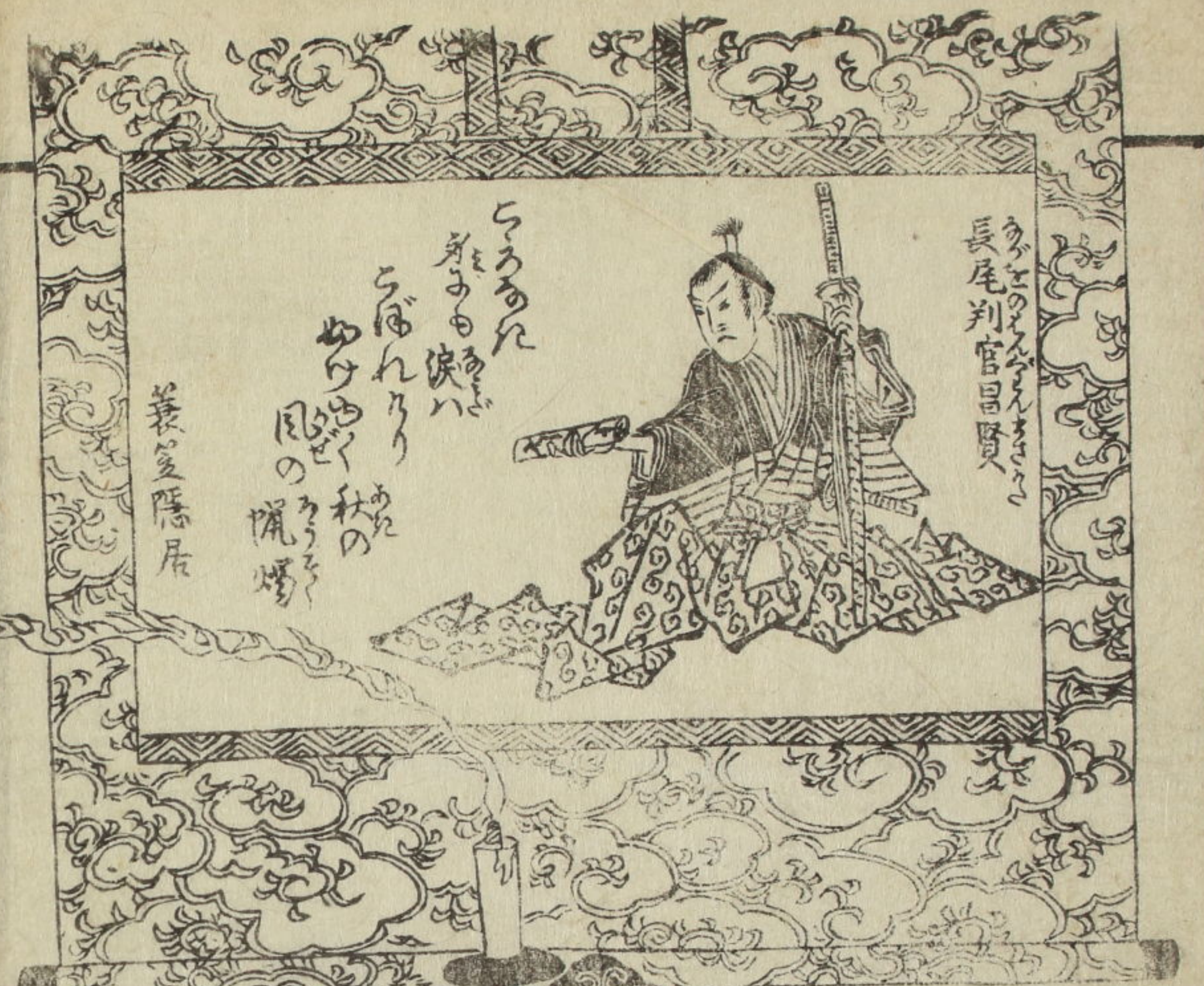
一ノ森 古今独歩兵法剣術の達人半七をばとく仇人を討つ後又仙人とすをのむ

文化 六年己巳卯月上旬稿了
七年庚午正月吉日度販

馬琴

曲亭





長尾判官目録

さうめん
あまもあま
さほれり
あつゆの秋の
風の燐燐

兼多隠居

南垂鉄燭人
燭人又燭奴亦燈輝と申す人形中なる者
唐の天竺送車といふ書に
申すところ人形をさるる海客を
おぼえておぼえんるまよふた本といふの
がくまの童子のつらさをほくらせられ
とてをりてつらさをほくらせられ
燭奴とあぶくる
とての又寧王と
さうめん人由本ありの女子よ
あつゆをさるるを燈輝とあぶくる
同書みええたり今國にあらはれ成氏
おぼえの童室をさるる後をこれをは
いり家上の僧正渡宋のくまのつらさを
ほくらせられつらさをほくらせられ
そのあつゆといふのくまのつらさを



贈君三尺霜

父雖言不與共
載天

刀屋半七

半七の子
七太郎

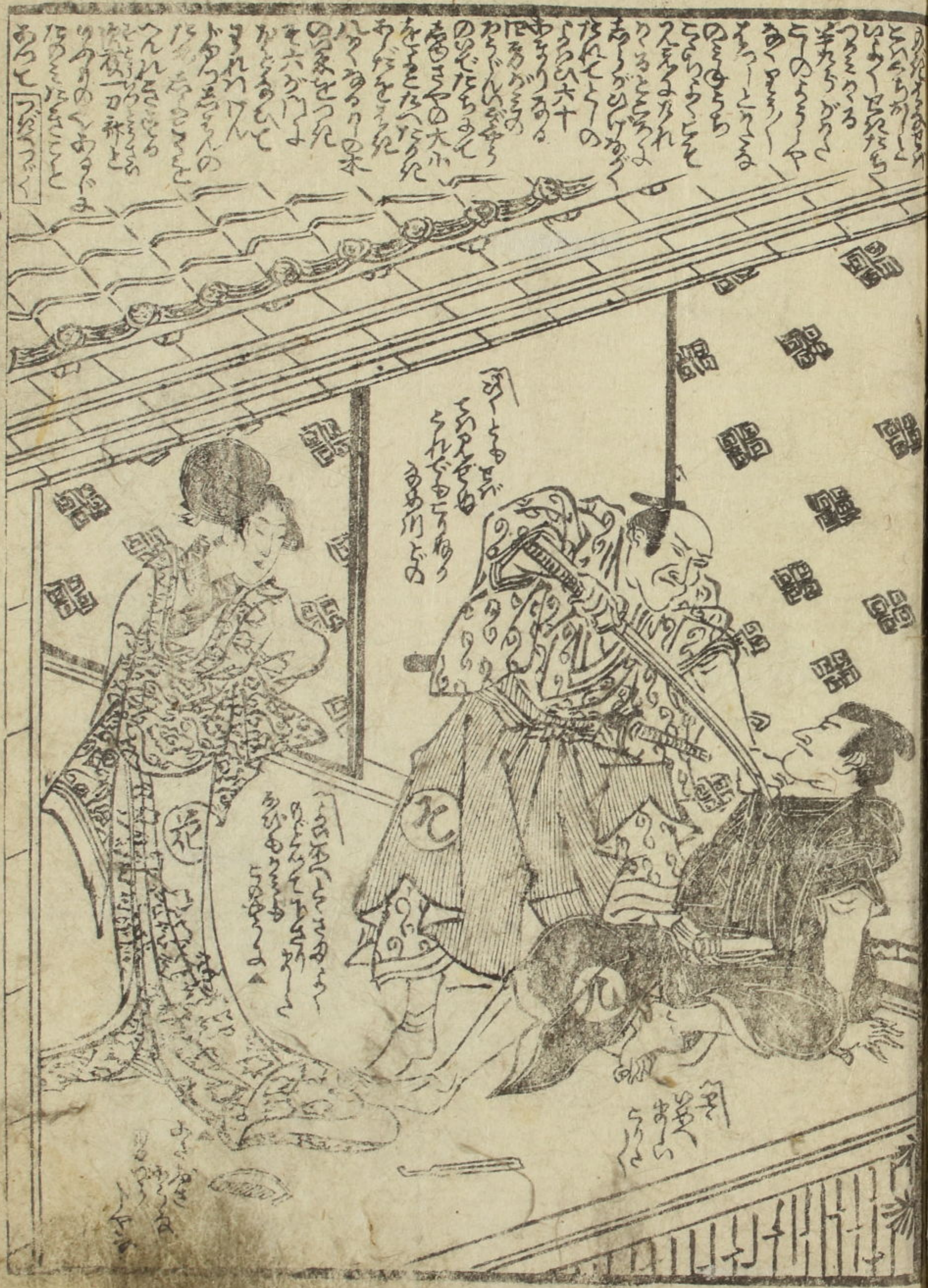
半七の妻
お花

貧乏女よりの
著作堂

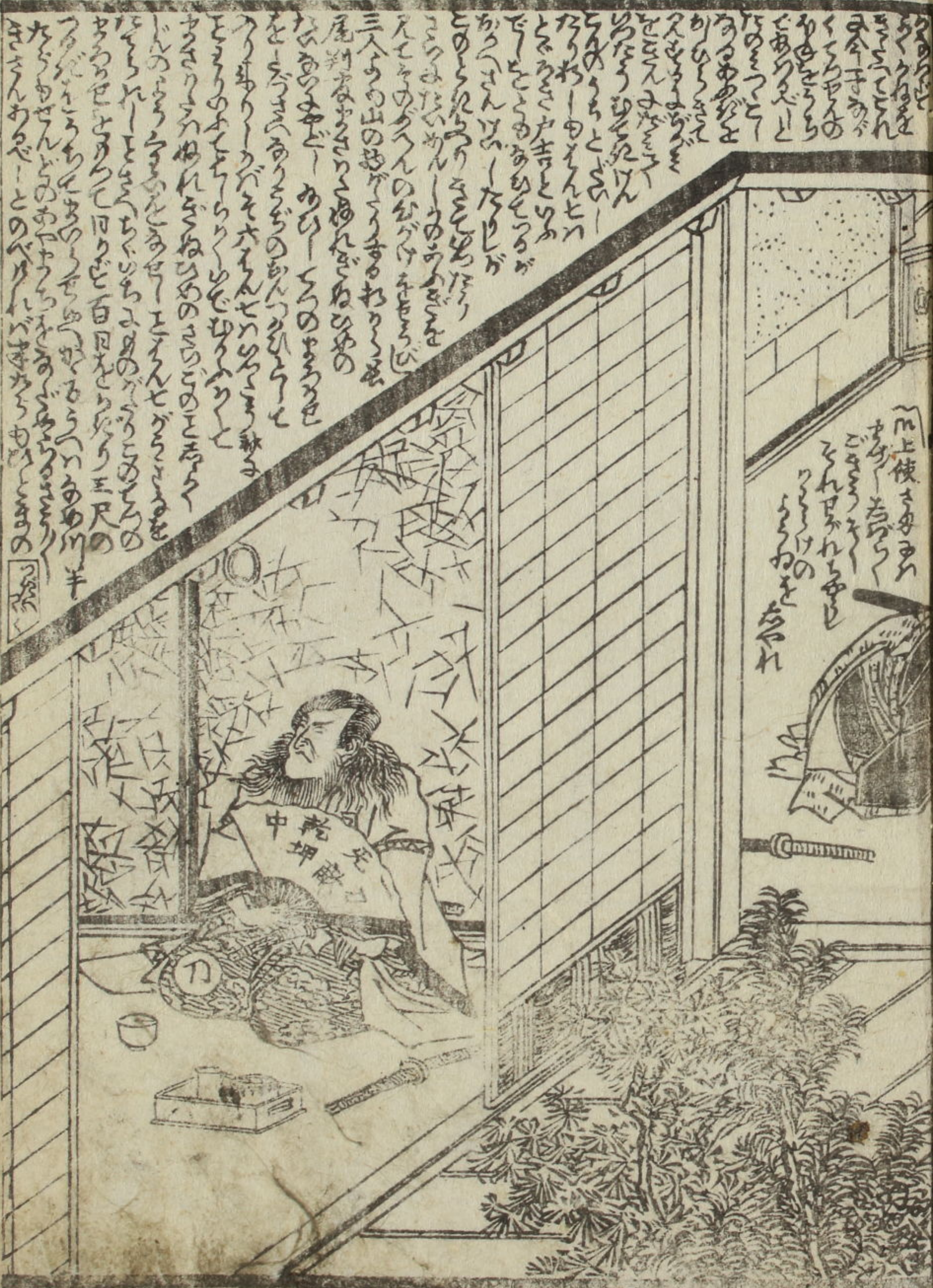
なを
ひんがし
ひんがし
ひんがし

中前

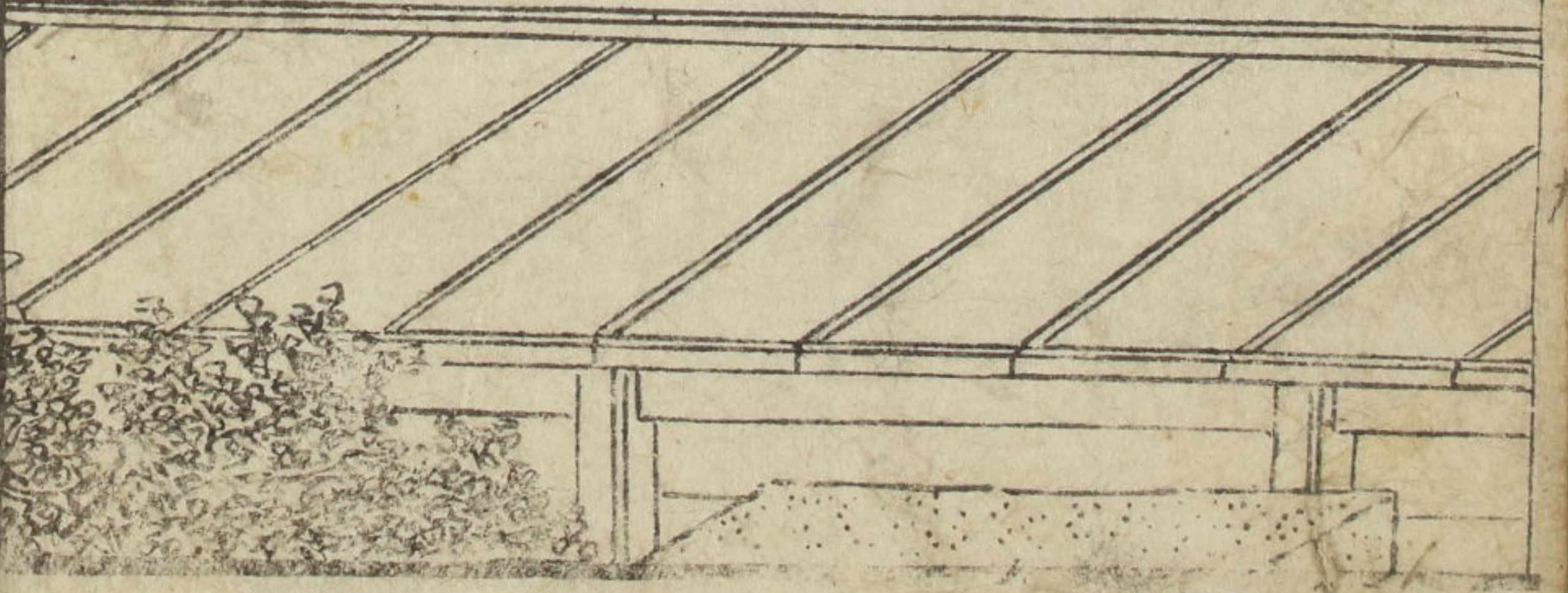




2の月



15
 14
 13
 12
 11
 10
 9
 8
 7
 6
 5
 4
 3
 2
 1



下前



12の月

大田和縁一家の
外はあつた

漁石雑誌
大本 出版
五册

右著作堂隨筆
多量の故作後
あつたを正し
あつたを正し
あつたを正し

あつたを正し
あつたを正し
あつたを正し
あつたを正し
あつたを正し



刺所
影壽堂山口半四郎
同久治郎

淳名伏討 春亭画 泉市叙

案月新刃明鑑

後

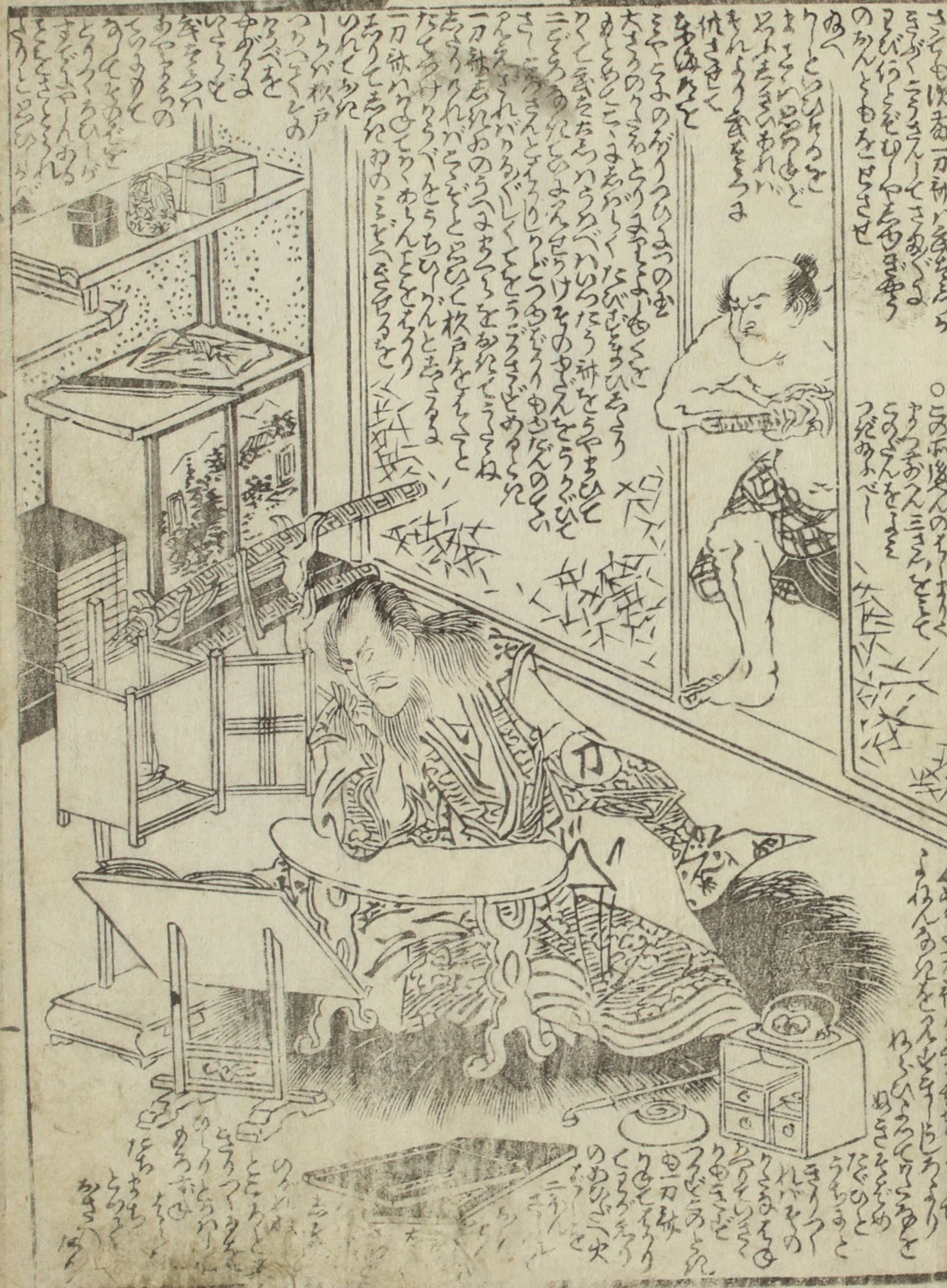
刀屋半七 馬琴作



白介

白介

上後



さし由次は二刀林の敵を討ち
 けりて三つはしりてさあぐり
 のかんともをこぼさせ

○この所後人のまじり
 するあえ三三三
 つたふんをよめ

あまの二刀林の敵を討ち
 けりて三つはしりてさあぐり
 のかんともをこぼさせ

あまの二刀林の敵を討ち
 けりて三つはしりてさあぐり
 のかんともをこぼさせ

あまの二刀林の敵を討ち
 けりて三つはしりてさあぐり
 のかんともをこぼさせ

あまの二刀林の敵を討ち
 けりて三つはしりてさあぐり
 のかんともをこぼさせ

あまの二刀林の敵を討ち
 けりて三つはしりてさあぐり
 のかんともをこぼさせ

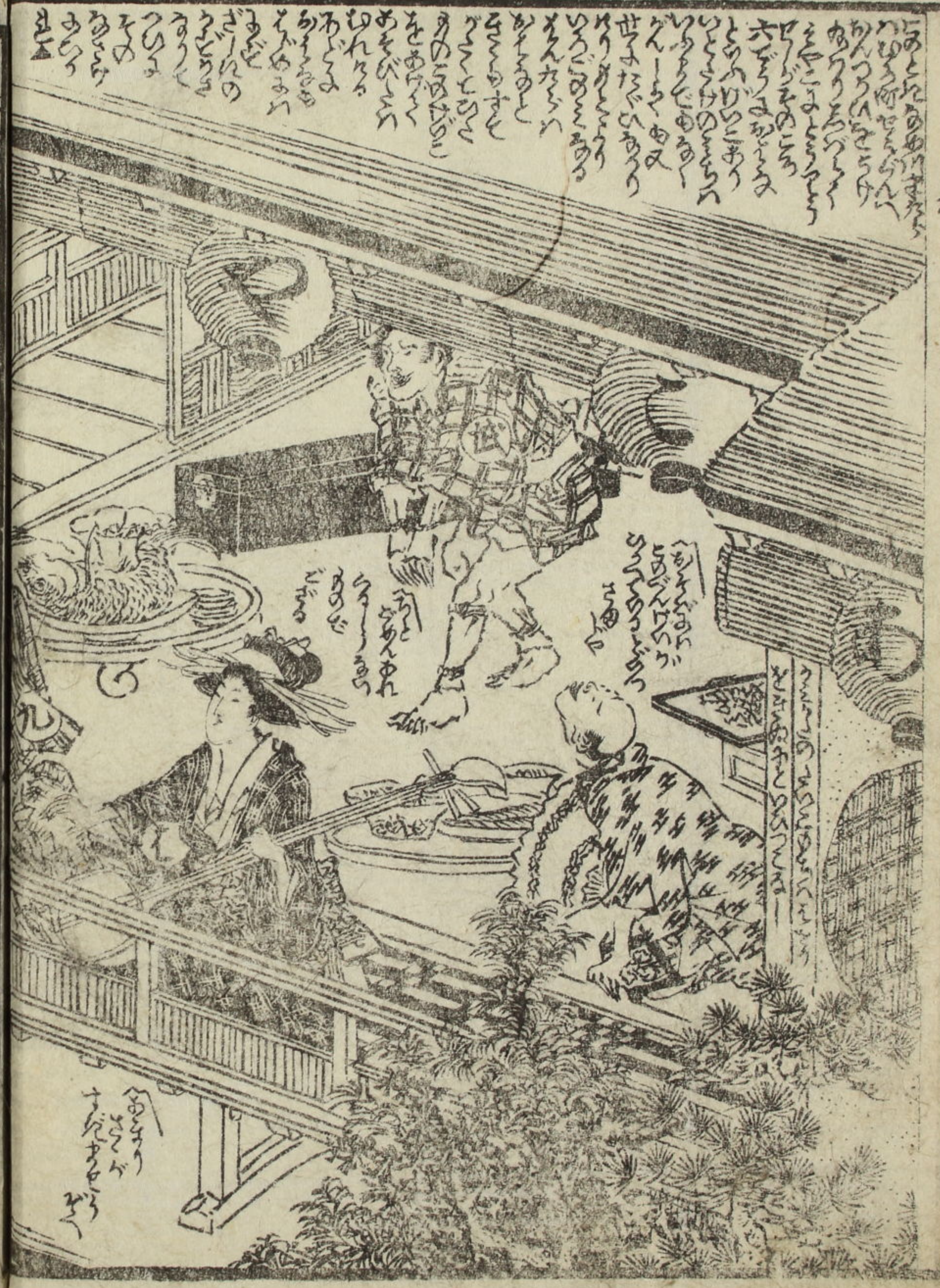
あまの二刀林の敵を討ち
 けりて三つはしりてさあぐり
 のかんともをこぼさせ



Vertical text column on the far left edge of the page.

Main vertical text columns on the left page, surrounding the illustration.

Vertical text columns at the bottom of the left page.



Vertical text columns at the top of the right page.

Main vertical text columns on the right page, surrounding the illustration.

Vertical text column on the far right edge of the page.

中後



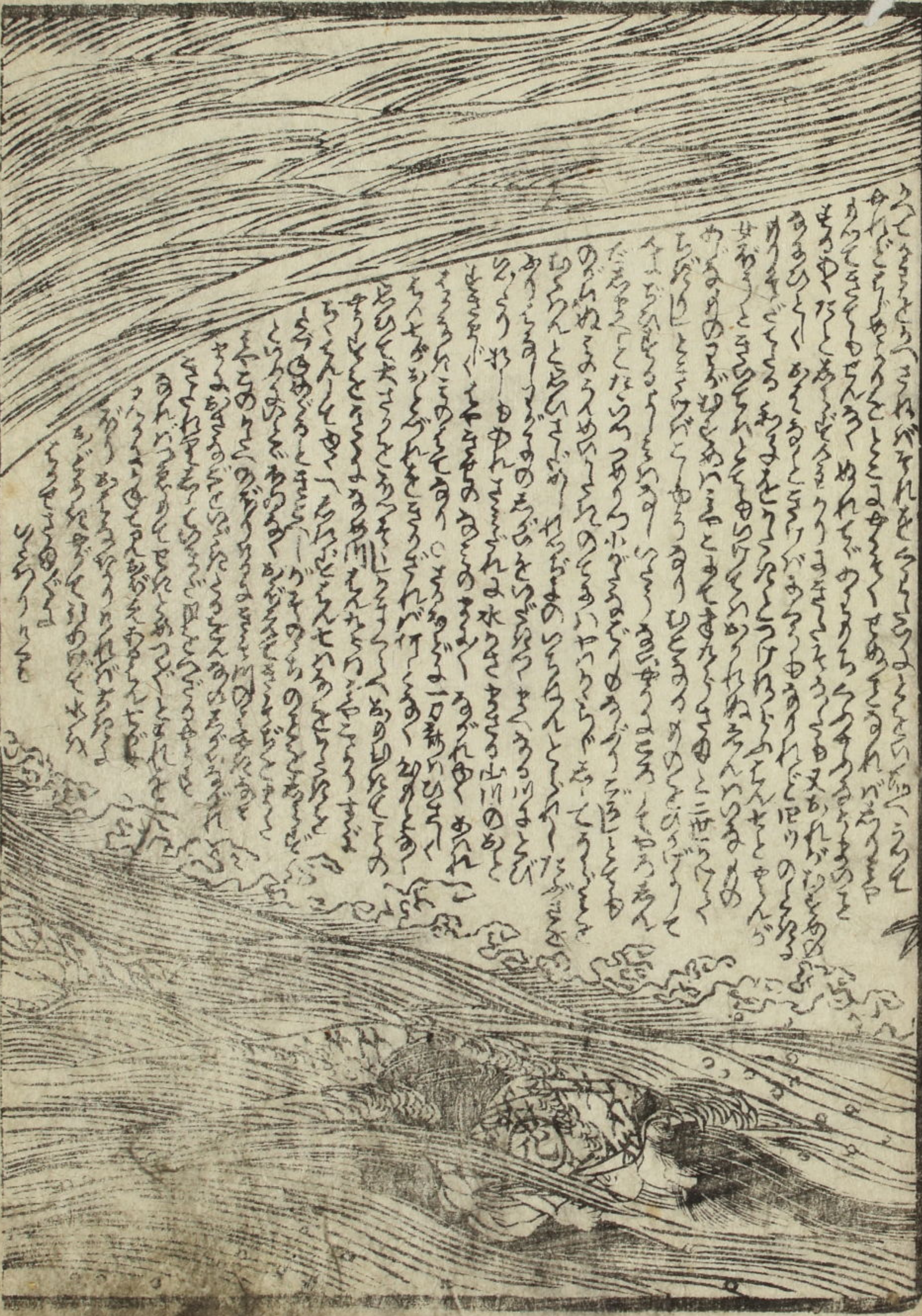
Vertical handwritten text in a cursive style, likely a transcription of a story or dialogue.

Vertical handwritten text at the bottom of the left page, including a small drawing of a leaf.

Vertical handwritten text at the top of the right page.



Vertical handwritten text at the bottom of the right page, including a small drawing of a bowl.



Handwritten text in the left margin, written vertically.

Handwritten text in the left margin, written vertically.

Handwritten text in the left margin, written vertically.

Handwritten text in the left margin, written vertically.

Handwritten text in the left margin, written vertically.



Handwritten text in the right margin, written vertically.

Handwritten text in the right margin, written vertically.

Handwritten text in the right margin, written vertically.

Handwritten text in the right margin, written vertically.

Handwritten text in the right margin, written vertically.

Handwritten text on the right edge of the page, written vertically.



上りて入るる松の川
のほとりには松の樹
の影を落とす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす



あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす

上りて入るる松の川
のほとりには松の樹
の影を落とす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす



あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす

あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす
あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす



あやうき鳥の鳴き
声は松の葉を
かきまわす

後下



又の

木



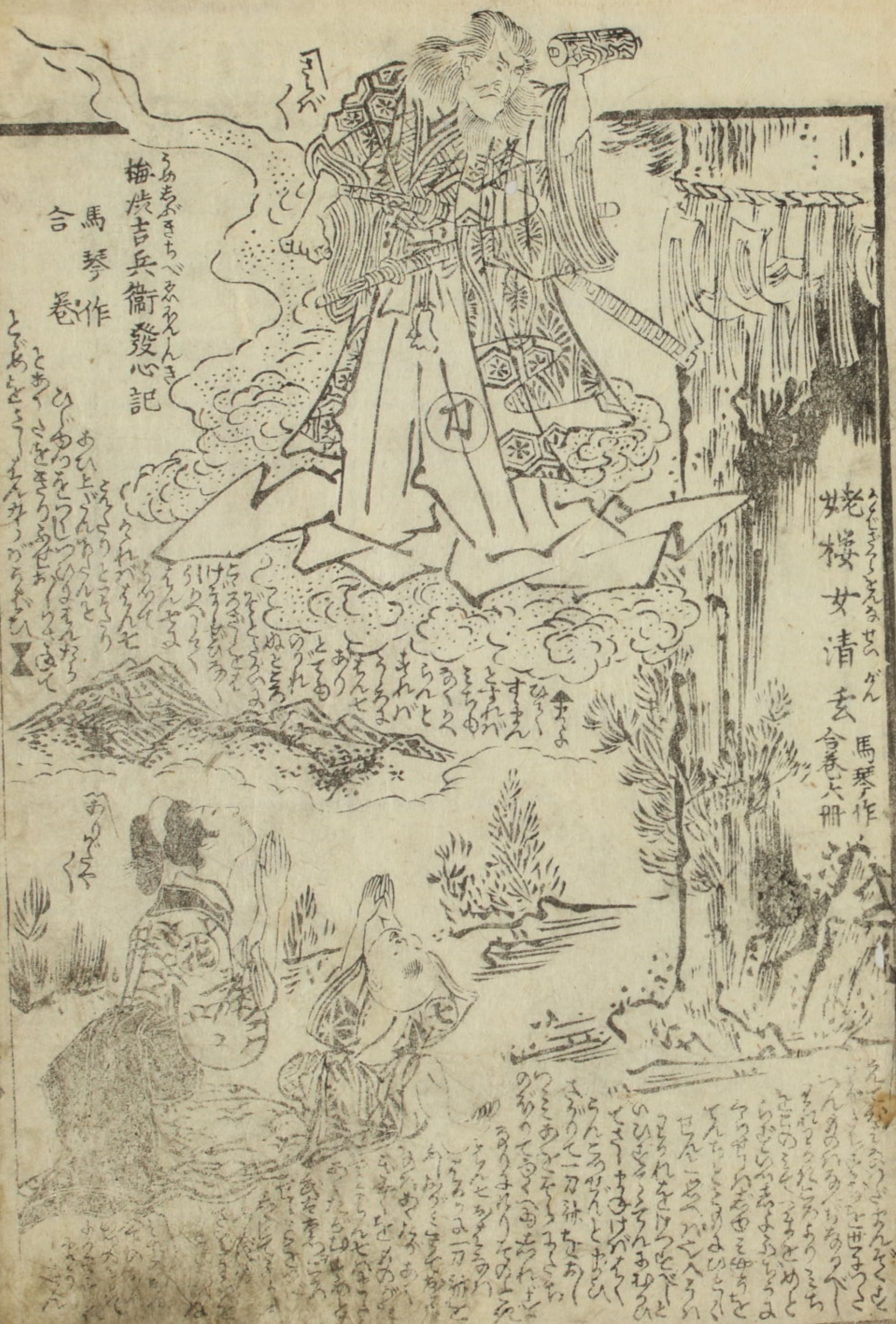
木ノ川

十一



松の川後
三十一
松の川後
三十一
松の川後
三十一

松の川後
三十一
松の川後
三十一
松の川後
三十一



梅茂吉兵衛發心記
馬琴作
合巻

姥樓女清玄
馬琴作
合巻六冊

梅茂吉兵衛發心記
馬琴作
合巻
梅茂吉兵衛發心記
馬琴作
合巻

Handwritten text in vertical columns on a greenish-blue paper cover. The text is written in a cursive style, likely a form of Japanese calligraphy (sōsho). The characters are dark and somewhat faded, with some ink bleed-through from the reverse side. The text is arranged in approximately four vertical columns, with the rightmost column being the most legible. The paper shows signs of age, including creases and discoloration.